

Under the Greenwood Tree :

崩壊する田園世界と分裂する Fancy の価値観

内 藤 歆 修

トマス・ハーディの著作のうち、出版された最初の作品 *Desperate Remedies* (1871) は色々な批評をされたが、リング酒造りの場面などの田園風景や農民の生活を描いた部分は概ね賞賛された。小説技法の確立に未だ到っていないハーディに、田園風景などの自然描写の好評が、次の小説を書く上での指標と勇気を与えてくれたのである。このような *Desperate Remedies* に与えられた批評家たちの忠告は、新進作家ハーディにかなり影響を及ぼしたようである。次の作 *Under the Greenwood Tree* ではこれらの忠告を念頭に置き、書き溜めてあった「田園の人々の生活を描いた物語」を題材にして、出版されることのなかった処女作 *The Poor Man and the Lady* の冒頭部分を取り入れ、牧歌的小説を大変な速さで書き上げた¹⁾。1871年8月にはマクミラン社に送られたがやんわりと出版を拒否された。だが ティンズリー社から翌1872年6月初め2巻本として何とか出版することができた。

この作品の原稿の巻頭に書かれた題名は、The Mellstock Quire or Under the Greenwood Tree, A Rural Painting of the Dutch School のうち The Mellstock Quire or の個所が横線で削除されて、それ以下が正式名称として残されている。「丁度その頃、詩から題を採ることが流行していたので」²⁾変更したとハーディは述べているが、ジェフリー・グリグソン (Geoffrey Grigson) はシェイクスピアの *As You Like It* の歌詞からではなく、古い同名のバラッドから採られたのだと述べている³⁾。

The new title he gave to 'The Mellstock Quire' confirms Hardy's intention and performance. He made it *Under the Greenwood Tree* not (though the publisher and reviewers and readers may have taken it that way, and though the change was made 'because titles from poetry were in fashion just then') from Shakespeare's song in *As You Like It*, but from the broadside ballad of 'Under the Greenwood Tree', in which countrymen and country girls, Jeffrey and Tom, Ursula and Joan, Roger and Bonny Bettee have rural fun under the greenwood tree (compare the last scene of the novel in Yalbury Wood) to music provided by Choir Pipe...

一旦は The Mellstock Quire の題名を削除してしまったハーディだが、この題名への愛着は断ち難く、1912年の序文⁴⁾には「本来、より適切と考えられる、『メルストックの聖歌隊』に戻すつもり」であると述べている。最終的には *Under the Greenwood Tree or The Mellstock Quire, A Rural Painting of the Dutch School* となり、最初の原稿と比べると Under the Greenwood Tree と The Mellstock Quire の順序が入れ替わっただけである。ハーディがこれだけ執着した題名であるからには、この題名に何らかの意味を込めていると考えられる。*Under the Greenwood Tree* はシェイクスピアの牧歌喜劇と同様の雰囲気暗示されるであろうし、前出のグリグソンの説にしても牧歌的な内容を予想させるのに充分である。作品の中心テーマは The Mellstock Quire であり、作者の両親たちをモデルにしたと言われる聖歌隊の人々、またそのクリスマスの聖歌巡礼の行事や色々な習慣である。この物語が最初に構想されたときには、「田園生活の場面のスケッチ」⁵⁾のような短い文章の集まりであったという。当初ハーディが書きついでいた文章は副題の A Rural Painting of the Dutch School とも言える、リアリスティックな田園生活のスケッチのようなものであったと考えてよいであろう。

Under the Greenwood Tree という題名はこの小説の構成にも影響を与えている。牧歌的背景とともに、四季のパターンを使いながら、全体が劇の形式に則っている。四季のうち、ある時季に物語が始まり、季節と共にプロットは進行して行き、様々な出来事が起こり、それによって内的及び外的葛藤が生じ相互作用を及ぼして行く。物語全体が五幕の形式を取っていて、牧歌的なウェセックスを舞台にして、冬、春、夏、秋、結びと四季を一巡する間に、前半の聖歌隊の消滅と、それ以降の女教師 Fancy Day を中心とする、無邪気な恋の顛末が自然にひとつの物語に溶け込んで行くことが意図されていたようだ。

この作品は作者自身が新しい全集版に付けた総序で行った分類のうち、「性格と環境の小説」(Novels of Character and Environment) に属しており、この系列の作品中最初に来るものである。ハーディの主要作品と見なされているものは、全てこの系列に含まれている。そしてこの系列の作品は、最後の *Jude the Obscure* を除き、全て舞台はウェセックスに限定されている。*Under the Greenwood Tree* はハーディの The Wessex Novels の出発点に立つ小説である。ウェセックスはやがて、厳しい姿を現し、数々の悲劇を生んで行くが、本作品では未だ表面上穏やかな牧歌的な田園風景にとどまっている。ここを舞台として、2つの物語が前後して進行して行く。初めに、メルストックの村の教会で何年もの長い間重要な役割を果たして来た聖歌隊が、教区委員をつとめる地主 Shiner や新任牧師 Maybold が導入を目指したオルガン演奏に、地位を奪われそうになることから波紋が生じ、辺りに影響を及ぼして行く。この出来事に、若い運送屋 Dick Dewy と美しい女教師 Fancy Day の恋愛物語が絡んで行くのである。Dick は聖歌隊のリーダーである Old William の孫であり、自らも聖歌隊の一

員として活躍している。Dick と同様に教区委員 Shiner と牧師 Maybold は共に若く美しい Fancy に憧れ、彼女をオルガン奏者にして、聖歌隊を解散しようと考えている。ここに聖歌隊の存否と Fancy を巡る恋の多角関係という2つのプロットはひとつに結び付くのである。即ち、聖歌隊が消滅の危機に瀕した時の、それに関わる村人の葛藤と混乱、思うように Fancy の心が捉えられない Dick Dewy の苦悩、この2つの問題がどのように解決されていくのか追って行くのが大筋である。更にその背後には、礼拝儀式の純化という信仰復興運動の推進するオルガン (barrel organ) の教会への導入が聖歌隊音楽による儀式の進行という古来の伝統を脅かすという問題が横たわっているのである。

題名の The Mellstock Quire で Choir とせず Quire としたのは、大変古めかしい雰囲気醸し出しているが、この時のハーディの関心がモデルとなった自分の祖父と父の時代のスティンズフィールド教会聖歌隊解散の顛末にあったので、作者はそれをメルストック聖歌隊消滅の過程に重ね合わせ、郷愁の情を以て語っているのである。実際に教会にオルガンが導入され、素人楽師たちのかき鳴らす楽器に代わった結果、聖歌隊は役割を免じられたのである。それが及ぼした変化は大きかった。単に教会の礼拝儀式進行の変更留まらず、村人たちの心の変化によって、村社会の結び付きの根底をも揺るがす程になった。ハーディは1896年の序⁶⁾の中で、本書については「5, 60年前の村々の、このような楽団に共通の人物、生活状態、習慣などの、かなり真実な描写が意図されたもの」とし、聖歌隊が単独のオルガン奏者にとって代わられたことを惜しみ、この変更がかえって教会側が振りかざした目的を打ち壊す方向に向かうことになったと指摘している。「その直接の影響としては、教区民たちの教会の行事への関心を減じたり、消滅させたりしてしまうことになった」のである。音楽に携わる者は今日のように一部の人々に限られてしまい、村人の関心という重要なつながりが破られてしまった。彼らは情熱をもってこの音楽活動に献身し、「その労苦は真に奉仕の仕事」というべきものであった。更に聖歌隊の楽しみは礼拝の奉仕に限られず、彼らの符本には聖歌と共に舞踏曲や歌謡曲も書き込まれていた。「聖歌と俗曲が出会い、時には甚だ奇怪な趣を示した」こともあったが、聖歌隊の解散は聖歌と俗曲の結び付きの上に成り立つ共同体的心情そのものの衰退にも繋がることとなったとハーディは考えている。「緑樹の陰で」共に憩い、共に歌い踊ることを心より楽しむ均質の世界、平和な、共同体意識に支えられたこの世界はオルガン導入という外部からの力によって分裂の危機に直面するのである。

物語は初め聖歌隊の主題が前面に出ているが、やがて恋愛物語に移行して行く。前半は聖歌隊のテーマが押し出され、村の伝統的習俗や生活感情が紹介される。作品の冒頭は自然界の言葉によって導入される。

To dwellers in a wood almost every species of tree has its voice as well as its feature.

At the passing of the breeze the fir-trees sob and moan no less distinctly than they rock; the holly whistles as it battles with itself; the ash hisses amid its quiverings; the beech rustles while its flat boughs rise and fall. And winter, which modifies the note of such trees as shed their leaves, does not destroy its individuality. (I-i)

作者は先ず聴覚に働きかけて情景描写を行い、読者の無意識の世界で音によって自然の神秘と力を強調し、その直ぐ後の視覚による絵画的な場面の導入を効果的にしている。そして陰影の濃い田園画が前面に展開して行く。「ある寒い星の瞬くクリスマスの前夜、こうした木々の囁きのはっきりと語りかける森の暗闇を、メルストックの十字路に通じる小道に沿って1人の男が歩いて来た」(I-i)と一転して作者は読者の視覚に迫って来る情景を描き出す。この鄙びた歌を生き生きと歌う男は若い運送屋の Dick Dewy である。その時、闇の中の声に呼び止められる。Dick の輪郭が大写しになる。「空を背にして立っている彼の姿が見えた。彼の横顔は黒いボール紙でできている紳士の肖像のように、明るい背景の中に浮き出していた」(ibid.)。彼を呼び止めたのはメルストック教区の聖歌隊の主だった人々であった。「彼らもまた昼の光と共に膨らみを失ってしまっていて、空を背に平板な輪郭となって歩いていた。それは、ギリシャまたはエトルリアの壺の、何か行列の図案を思わせた」(ibid.)。Dick と聖歌隊の黒いシルエットは重なり合って、暗闇の対象の鮮やかな絵画の世界を描き出している。彼らは時空の制約から抜け出し、生き生きとした自由奔放な詩情の世界に入って行く。これはハーディの言う「5, 60年前の村々の楽団のかなり忠実な姿が描写された世界」である。読み始めた途端に、読者は *Under the Greenwood Tree* の絵画的世界の真っ直中になることになる。

一行は祖父 William Dewy, Dick, 父 Reuben Dewy, そして Michael Mail で、この4人がそれぞれヴァイオリンチェロ、最高部ヴァイオリン、次中音ヴァイオリン、第2ヴァイオリンのパートを担い、弦楽団を構成している。他に歌を担当するのが2人の大人と7人の少年である。作者がこれら第2, 第3の人物を描き出す際の語り方は、芝居のト書きのような説明調で一貫している。前作 *Desperate Remedies* でも多用されたト書き調の描写法は、これから素朴で輪郭の明瞭な人物像を作品世界に導入する方法として、余分な飾りのない、簡素で適切なものと言えよう。

夜10時頃、彼らは Reuben の家に集まり、リング酒を振る舞われる。酒を飲みながら、村の出来事を賑やかに噂したり、弦の調子を合わせたりしていたが、真夜中の12時に、クリスマス・イヴ恒例の行事である、村の中をキャロルを歌い祝福して歩く、巡回に出掛ける。この伝統的な行事を滞りなく行おうとする彼らにも、時代の変化による新しい波が都会からひたひたと押し寄せていた。後進的な地方であるウェセックスに住み、伝統の中に暮らしながら呑気そうに見える聖歌隊の仲間たちにも、この都会からの波は肌に感じられる程現実味を帯びたもの

になっていた。彼らにとってその影響が具体的な形となったものは、周辺の教会の弦楽団の解散の動きであり、最近到着したオルガンであり、また新任牧師の Maybold が弦楽器を止めオルガンを教会音楽として、採り入れようと目論んでいるという噂であった。

この平和な共同体世界に、外部からの脅威は Maybold 牧師という形を取って現れる。そして牧師の改革は彼の想像を越えた強烈で深刻な衝撃となって、村人が今まで守ってきた伝統を踏みしめることになる。Mail の「この州で昔からの弦楽団で残っているのは、もう俺たちばかりじゃなかろうか？ バレル・オルガンとかいった足で吹く奴に類したものが近年いやに入り込んで来たからな」(I-iv) という訴えは、無学な彼らが肌で感じる現実の感想であり、靴屋の Penny の「まったく、おいらたちのような役立たずになってしまった者は、ヴァイオリンと一緒に教会からとっとと出て行ってしまやあいいんだろうな」という叫びは、目前に迫って来た聖歌隊の行く末を先取りしている。一旦決まった流れの方向は変えることはできない。今までは聖歌隊をどこでも心待ちにし、歓迎してくれたが、この夜は微妙に変化していた。

最初に行った領主邸では、演奏が一通り終わっても、邸内にも周りにも人気はなくひっそりと静まっていた。一方、新任教師 Fancy の応答は十分とは言えないにしても、彼らの心を多少は慰めてくれた。学校の敷地で、一行の賛美歌が流れても、すぐには答えがなく、皆は不吉なものを感じた。彼らの予感していたように、平和なこの田園地帯にも、既に新旧秩序間の緊張が始まっていたのである。暫くの間彼らに緊張感が漂う。都会で教育を受けて、村に戻って来たばかりのこの若い女教師の反応は驚く程遅かった。3 曲歌い終わっても何の返答も得られなかった一行に苛立ちの気持ちが広がり、彼女は留守なのかもしれないと疑い始めた時やっと、暗い部屋に次第に灯火が明るみ、お礼の声が聞こえた。聖歌隊が窓の外にいることに彼女が気付いたのは、演奏や歌声のためでなく、彼らのクリスマスを告げる大きな叫び声のためだったのである。これでは、Reuben Dewy が囁いた意見「多分あのお嬢さん、どこか音楽の都からでも来て、俺たちのやることを馬鹿にでもしているんだろうぜ」(ibid.) も、腹立ちまぎれの八つ当たりとも言えなさそうである。

村の学校の一室に明かりがとり、その光が映し出す窓に人々の目が注がれる。明かりがブラインドに近付き、くっきりと外部に映し出される。やがてブラインドが上がり、若い女性の姿が窓の枠で額縁にはめ込まれた絵のように縁取られて現れる。ここで 1 枚の絵が読者の眼前に掲げられるのである。

...an increasing light made itself visible in one of the windows of the upper floor. It came so close to the blind that the exact position of the flame could be perceived from the outside. Remaining steady for an instant, the blind went upward from before it, revealing to thirty concentrated eyes a young girl framed as a picture by the window

architrave, and unconsciously illuminating her countenance to a vivid brightness by a candle she held in her left hand, close to her face, her right hand being extended to the side of the window. She was wrapped in a white robe of some kind, whilst down her shoulders fell a twining profusion of marvellously rich hair, in a wild disorder which proclaimed it to be only during the invisible hours of the night that such a condition was discoverable. Her bright eyes were looking into the grey world outside with an uncertain expression, oscillating between courage and shyness, which, as she recognized the semicircular group of dark forms gathered before her, transformed itself into pleasant resolution. (I-v)

Fancy はこの後、一言礼を言って天使のような姿をすぐ隠してしまうのだが、読者は彼女に完全に魅了されてしまった Dick に負けず劣らず、この場面に強い印象を与えられよう。一瞬にして読者は、この光景を眺めている30の瞳を通して、作品世界に於ける出来事を見ていることになる。形の上では Fancy が窓際に姿を現し、その姿を15人の瞳が路上から見上げている。この場面を描いている作者と、それを読み、想像を働かせ、イメージを描いていわば心の眼で場面を見ている読者との間に或る緊密な関係が、意識せぬうちに成立していて、読者はこの優れた絵画的描写の世界の中に取り込まれてしまう。初めは動画的である場面が、クライマックスに来て、枠の中に入れられ、1枚の完成した絵画として静止する。画家である作者が最も印象的な一瞬の場면을、そこに到る過程を示しながら切り取って提示する現場に、読者は立ち会うことになる。その過程を経てから絵の鑑賞が許される。そして Fancy の姿が枠内で固定された絵となったとき、読者は村人たちと同じ位置にいて彼女を絵として眺めるばかりでなく、絵のように姿を現した Fancy を見つめる村人たちを描いたもう1枚の絵を見る立場に置かれている。この絵画的描写法は既に前作 *Desperate Remedies* で、父が建築現場の足組から落ちて行くのを目撃する Cytherea を描く場面等で優れた効果を上げており、また本作品に限らず、作者の今後の作品においても重要な場面描写には幾度か用いられることになる。

絵画的技法はこれから後の作品において、より発展進化していくにしても、この作品では、読者が作品に直接感情移入し溶け込んで行くことは許されず、人物の世界に入り込むにしても、絶えず第三者の助けを借りていることを意識させられている。作中登場人物である、Fancy, Dick, Old William などといった個々の人物を風俗画中の人物として見るように読者に対して方向付けをしているのは外ならぬ作者の存在であり意志である。この作品は副題が示唆しているように1枚の絵と見なせよう。その絵は読者の外部に存在しており、読者は絵の内側に入っていくことができない。作者に阻止されているのである。作者は読者に人物の内面世界へ飛び込んでもらいたくないし、彼らと苦楽を共にしたり会話を楽しんでももらいたくない。作者の考えは、絵画は適当な距離を保って鑑賞すべきであるということで、この作品世

界へもこういう態度で接近するよう暗に読者に勧めているのである。人物の内面世界を描写するにしても、外部から観察されたものとして、比較的客観的に、さりげなく、適度な推測を交えながらも、程良く抑制を利かせている語りの態度はそれ自体、読者と作品世界との間に距離を与えている。この距離感を生む視覚的、絵画的 방법이全て、読者と作品世界とを関連付けており、本作品に漂う静穏さ、透明性、素朴と洗練が微妙に相互依存して醸し出す豊かな雰囲気を作り出している。同時に、読者の視線に指示を与え、作品世界の見方まで教える語り手の目の動きは、作中人物の存在まで及び、その人物像は平面的で膨らみの少ない傾向を持つようになってしまっている。村の人々は、光を当てられた部分からだけしか判断できない。勿論、それだけで十分納得させられる明快さを持っているにしても、その全体像は読者に豊かなイメージを与えにくい。彼らの存在は印象付けられるが、彼ら自身には不意打ち、対立、葛藤といった意外性から生まれるあくの強さとか、心の激しい動きなどは、殆ど見出すことができない。後の作品 *Far from the Madding Crowd* の Bathsheba, *The Return of the Native* の Eustacia, *The Mayor of Casterbridge* の Henchard などが感情の起伏の激しい行動を取り、辺りの者たちまで巻き込んで、悲劇的状况を作り出してしまうのとは大いに異なっている。

こうした印象的な登場をした Fancy にも、聖歌隊やこれから訪れる農場主や牧師にも同様のことが言える。聖歌隊に彼らの個性を表す反応をして、夜の暗闇の中に消えて行くのである。光に包まれて美しい姿を現した Fancy は「聖歌隊のみなさん、有り難う」と言ってすばやく姿を消してしまう。農場主は聖歌隊が演奏を始めると、暗闇の中から突然「止めてくれませんか。ここではそのわめき声を。頭も割れんばかりの奴には静かな夜が、夜の方がいいのだ」と怒鳴った。それに反応して、更に音量を上げた演奏や歌に悪口雑言をわめく Shiner。彼はメルストック教区の委員で、本来なら教区の聖歌隊を擁護し、育成して行かなければならない立場であるのに、毎年恒例の聖歌隊の訪問に対して彼の家的大门は固く閉ざされ、明かりもつけていない。こうした事実により意気消沈せぬように努め、例年のように賛美歌演奏を始める聖歌隊に彼は不当な態度を取るのである。しかも、Shiner は起きていたにも拘わらず、故意に消灯し、真っ暗な家の中に姿を隠していたのではないかと思わせる描写がされている。このような道義に反するひどい扱いに激怒した一行は音量を上げて、Shiner の罵詈雑言に対抗する。両者共互いに個人的な悪意を抱いている訳ではないが、Shiner は弦楽器を廃し、教会にオルガンを導入したいと提案した張本人であり、教会音楽の改革と都会化を目指しているので聖歌隊に対してこのような態度を取ってしまったのであろう。

牧師の Maybold の態度も、聖歌隊に冷ややかという点では、大同小異である。反応が少なすぎて無関心に見え、信仰のため教会のために寒さもいとわず、行動している聖歌隊に対して、Shiner よりも不当な仕打ちをしていることになる。聖歌隊が最後に訪れた牧師館では、聖職者の耳に相応しい選曲まで心配りをしたのに、Maybold は窓を開け顔を出すわけでも、ま

た大した感動の様子を示すでもなく、深い寝具の奥から小声でお礼をいうだけであった。この牧師は伝統的な古い制度を廃し新しい教会理念導入に忙しく、教会音楽や村人たちの信仰生活の指導に対して確乎たる信念が見受けられない。彼は教区民の心情を考えず、自己の信仰理念を一方的に押しつける自己中心的な態度に終始し、村人たちの聖歌隊存続を願う声にも一顧だにすることはしない。

この Maybold の無関心さは聖歌隊にとって、殆ど無視と言った方が良いものであった。クリスマスの朝、彼らの声は疲れのためにはっきりせず、弦の調子は大気の湿気のために悪く、ヴァイオリンの音色は冴えない。それに対し Maybold はあからさまに不愉快な顔をするのである。聖歌隊にとって不吉な予兆はこれに留まることはない。教会内で賛美歌を練習していた Dick の目には「昨夜の幻が、決して幻などではなかったかのように端然と入り口の扉から入って来るのが見えた。彼女の動作によって、新しい雰囲気、この古びた建物に突然に吹き込まれたように見えた」(I-v)。Fancy が都会の新しい空気と共に颯爽と古い教会に入ってきたのである。教区委員の Shiner に導かれた Fancy の持つ新しい雰囲気は「ディックの身体と魂とを新しい感動で高鳴らせた」のであるが、また「偶然か、運命か、このクリスマスの朝に、メルストック教会に出席していたもう 1 人の青年も、礼拝の終わりの頃に同じ美しい娘の姿に、同様に興味を引く存在を本能的に感じとっていた」(V-vi)。この青年牧師 Maybold の心情は未熟な状態で、本人にしてもただ自分の心に驚くほどであったのである。

クリスマスの夜、運送屋 Reuben の家でパーティが催され、Shiner や Fancy も招かれる。Shiner は「真っ赤なギョロ目と荒い呼吸と、陰気な微笑を口元に漂わせているが、決して笑わぬ」という特徴で一際目立っている人物である。Fancy が好きで、何とか自分の方に気を引こうとしていて、このパーティでは Dick との間で滑稽な争奪戦を繰り広げることになる。Dick の愛の衝動は、ここでダンスという肉体と感覚を総動員した、激しい、根元的な行為を通して示される。彼はダンスをしている Fancy の肉体の動きに目を釘付けにされ、Shiner と踊っている彼女のステップの軽やかさに目を奪われてしまう。Dick の Fancy への想いは益々募り、村人たちの踊りの動きが激しくなっていくにつれて更に高揚して行く。Fancy と踊るとき Dick の興奮は最高潮になる。この一体となった恋人たちにとって、自分たちを除く部屋中の全てのもの、全ての人間が非現実な存在と化してしまう。強い印象を与えるこの場面において、Dick の Fancy に対する想いは決定的段階にまで発展して行く。だがこのような激しい官能的な場面でさえ、作者の視線の温度は高くない。作者は Dick や Fancy の恋に、あるいは個人的な情念の世界に深入りすることはない。Fancy は Dick の目を通して、その外的に現れた行動や姿形が観察されているに過ぎない。読者はダンスが終わり、Dick の興奮も醒めた時、再び冷静な語り手の視線を感じる。そして 2 人の個人的な愛の姿は、もっと広い空間で、より大きな視点のもとで眺められるべきものであったと気付かされるのである。別れの時、

Fancy の態度はそれまでとは全く違ってよそよそしく、冷たく若者の目に映る。

‘What a difference!’ thought the young man—hoary cynic *pro tem*. ‘What a miserable deceiving difference between the manners of a maid’s life at dancing times and at others! Look at this lovely Fancy! Through the whole past evening touchable, squeezable—even kissable! For whole half-hours I held her so close to me that not a sheet of paper could have been slipped between us; and I could feel her heart only just outside my own, her life beating on so close to mine, that I was aware of every breath in it. A flit is made upstairs—a hat and a cloak put on—and I no more dare to touch her than—’ Thought failed him, and he returned to realities. (I-viii)

この文章の前までの Dick や Fancy に直接に言及する語り口と変わって、この文章では一転、Dick の Fancy についての感想は、一般的に ‘Young man’ が ‘Maid’ に抱いた感情へと、即ち Dick の個人的な気持ちが若者が乙女に抱く普遍的な感情へと変質させられている。ここで述べられているのは Dick の考えであるように装われているが、実際には作者の生の声であることは明白である。社交の場であるダンス会場という公の世界と個人的内面世界とを結ぶ非現実の仮想世界に、この 2 人の若者たちは恋する男女の典型の 1 つとして投げ出されているのである。全てが終わって Dick は「彼女がさっきまで占めていた椅子を眺めた。それは、宝石が引き剥がされたはめ込み台のように見えていた」。Dick の想いとは別に時は流れ留まることはない。

春になった或る夕方聖歌隊の人々は、靴屋の Penny の仕事場に集まり、新旧牧師の比較の噂話に花を咲かせた。亡くなった前の牧師 Grinham を懐かしむ声ばかりが出され、今の牧師 Maybold の教会の改革や教区民への押し付けがましい過剰な布教などが話題に上る。前任者の緩やかで、村人の心情に沿った布教の仕方を廃し、教会側の理念や考えばかりを押しつけ、村人の伝統的な信仰の在り方を否定し、教区を刷新しようという意気込みをあらわにした Maybold の本質を彼らなりに見抜いている。この新任牧師は着任早々「教会を変えようとしたが、お金がかかるので止めてしまった。その余波が聖歌隊に及び根こそぎ追い出すようなことになったのだ」(II-ii) と Penny や Reuben が言っているように、彼らは聖歌隊がどうなるかよく分かっている。更にその場で、Maybold はどうして Fancy がオルガンを弾くことを知ったのかに話題が集中したとき、Penny の奥さんが牧師がかなり熱っぽい眼差しで Fancy を見ていたようだと言ふ。村人の前では牧師も教会の權威の裏に隠された本音を簡単に読み取られてしまう。彼らにとって聖歌隊の消滅は断腸の思いではあるが、現実の流れに強く逆らおうとはしない。議論の末、翌日の晩 6 時に、代表が牧師のもとへ、聖歌隊の存亡に

ついて交渉に出掛けることに決まった。その晩 Reuben を先頭に聖歌隊の面々は牧師館に赴く (II-iv)。Reuben は牧師に不躰にならないように、無念の気持ちを抑えて、聖歌隊の廃止について「もしクリスマスに、多少大げさに華々しく倒れれば、俺たちは立派な最期を遂げたことになるわけでした。とくにどうといういわれもない・・・名もないただの日に自然に消えてなくなりたくはないのです」 (II-vi) と懇願するが、名もない唯の日曜日に廃止しないということは受け入れられたが、牧師の提案であるミカエル祭頃という折衷案で妥協することになる。ここに教養のある聖職者よりも学問のない村人の方が、教会を思う気持ちでも、人格的にも勝っていることが見て取れよう。

聖歌隊の人々は帰路 Reuben から、Fancy を推薦した元凶は Shiner であると聞かされ激昂する。

‘Why, Shiner is for putting forward that young woman that only last night I was saying was our Dick’s sweetheart, but I suppose can’t be, and making much of her in the sight of the congregation, and thinking he’ll win her by showing her off. Well, perhaps ’a woll.’

‘Then the music is second to the woman, the other churchwarden is second to Shiner, the pa’son is second to the churchwardens, and God A’mighty is nowhere at all.’ (II-v)

ここで Shiner と Fancy に対して反感が燃え盛るが、おおらかな村人は彼らとずっと敵対し続けることはない。牧師館における聖歌隊の人々の言動はユーモラスに描かれているが、これはハーディが1912年版の「序」で「大変軽く、時には非常に滑稽に、軽薄なまでに」描写されていると反省している例の1つである。これ程までに村人たちを明るく、おおらかに描いたのは、対照的に牧師の村人に対する無理解、無関心さを際立たせる作者の意図でもあったろう。この場面で聖歌隊消滅の危機からの救済を訴える村人たちへの彼の対応は無関心そのもので、滅び行く田園文化への愛着など微塵も感じられない。彼のこの一貫した無関心さにより、牧師でありながら大した権限も持たないこともあって、聖歌隊に殆ど同情せずに、教区委員という社会的地位の持ち主 Shiner の提案を受け入れてしまっている。聖歌合唱という伝統的な行為を通して守られてきた共同体意識が団結した涙ぐましいプロテストは、Maybold 牧師の巧みな言い逃れに会い、クリスマスまで続けたいと考えていた Reuben の意図通りにはならず、ミカエル祭までに妥協させられて、牧師は当初の目的を達してしまう。彼は結局古い伝統に終止符を打ち、新しいオルガンという異質なものをこの地方に持ち込むことになった。

Under the Greenwood Tree の前半部は、都市文明の象徴としてのオルガンが田園生活に侵入し始め、教会から弦楽による音楽を締め出し、100年余にわたって栄えて来たメルストック聖歌隊を解散へと追い込んで行く時代の変化の描写に費やされている。この聖歌隊の退陣

は都市文明に追いやられて行く田園風景そのものを象徴している。

ハーディは1872年に *Under the Greenwood Tree* を出版した時点で、既に都市化が田園にもたらすことになる宗教的、精神的退廃を予感はしていたが、メルストック聖歌隊に暗い敗北感や挫折感を抱かせていない。廃止を受け入れる彼らの態度も実に穏やかで落着いていて、余裕さえ感じられる。彼らは恨みがましい不平を多少述べているが、穏やかで、威厳に満ちた態度で、Shiner や Maybold, Fancy たちの導入したオルガンに席を譲るべく身を引いたのである。長老の William Dewy にしても、聖歌隊の解散を嘆きながらも、Maybold を不当に恨んだりせず、牧師の良さを認めようとする公平さを持ち合わせている。

この場面以降、存続の日限を切られ、廃止と決まった聖歌隊の話は後退し背景に追いやられ、前面には Dick と Fancy の恋物語が出て来る。平和な田園生活の中の新旧の秩序というテーマは、聖歌隊の解散問題が片づく、この2人の男女の恋愛の形を取って現れるのである。

旧態依然とした後進のこの地にとって、都市化の波という外部の圧力と同じ位重要なことは、この田園の住人たちの間に起こりつつある内部の分裂であった。これまでと違って既に村人が全て均質な価値観を共有した生活をしているとは言えなくなっていた。Fancy の父親 Geoffrey Day はそういった人物である。一介の猟番から身を起し、今やヨールベリーの森の奥深く住み、ウェセックス伯の領地の1つで伯の猟番頭となり、その土地一帯の管理人を務めており、木材などを取り扱う商売にも携わっている。同じ田園世界に住みながら、Dewy 親子や聖歌隊の人々とは違って経済的優位な立場に立つ。彼は1つ上の階級への仲間入りを目指す階層に属している。運送屋 Reuben とははっきりと異なり、対照的な生活をしている。この2人の家の趣も主人の性格、生き方を表して全く対照的である。

The walls of the dwelling were for the most part covered with creepers, though these were rather beaten back from the doorway—a feature which was worn and scratched by much passing in and out, giving it by day the appearance of an old keyhole. Light streamed through the cracks and joints of outbuildings a little way from the cottage, a sight which nourished a fancy that the purpose of the erection must be rather to veil bright attractions than to shelter unsightly necessities. The noise of a beetle and wedges and the splintering of wood was periodically heard from this direction; and at some little distance further a steady regular munching and the occasional scurr of a rope betokened a stable, and horses feeding within it. (I-ii)

物語の初めで紹介されるこの家は運送屋 Reuben の住まいである。職業柄、人の出入りは多

く、近くには馬のいる気配までしており、生き生きとした暖かさが感じられる。家や庭や離れ屋も一体となって、家庭の役割と仕事の役割が不可分であることがすぐ推測できる。これがメルストック村の中心風景であり、ここの住人の三代に亙る人々に暗示されているように社会的階級の区別などのない庶民の世界である。そこには誰をも区別なく飲んで受け入れる田園社会の暖かなおおらかさが漂っている。

もう一方の描かれている家は Geoffrey Day の家である。

The most striking point about the room was the furniture. This was a repetition upon inanimate objects of the old principle introduced by Noah, consisting for the most part of two articles of every sort. The duplicate system of furnishing owed its existence to the forethought of Fancy's mother, exercised from the date of Fancy's birthday onwards. The arrangement spoke for itself: nobody who knew the tone of the household could look at the goods without being aware that the second set was a provision for Fancy when she should marry and have a house of her own. The most noticeable instance was a pair of green-faced eight-day clocks ticking alternately, which were severally two-and-a-half minutes and three minutes striking the hour of twelve.... These chief specimens of the marriage provision were supported on the right by a couple of kitchen dressers, each fitted complete with their cups, dishes, and plates, in their turn followed by two dumb-waiters, two family Bibles, two warming-pans, and two intermixed sets of chairs. (II-vi)

Day 家の特徴は部屋の家具にあった。作者は家具や家庭用品の 1 つひとつを、戸棚、皿、茶碗、井などまで詳しく説明して行く。これらのものは全て、一対ずつ揃っていて、その片方は Fancy が結婚してからの所帯道具の用意になっていた。家の中は整然としており、「交互に時を刻んでいる一対の緑色の八日巻き時計」が必死に競争しながら鳴り響いている。この 2 つの家は、住人の特徴を忠実に反映しており、Dewy の家は社交の中心、人々の集まる所である一方、Day 家には人の出入りは滅多になく、他人に乱されることのない秩序正しい生活が、緑色の 2 つの時計のように、一定のリズムを以て送られている。このように両家が対照的であるということは、互いに不足な個所を補完し合える可能性があるということでもある。

今まではほぼ均質であった田園世界の内部の分裂は既に始まっている。Reuben Dewy と Geoffrey Day の家の外見すらこれだけ異なっている。田園社会の代表的人物 Reuben や靴屋 Penny、その他の聖歌隊の主体を占める人々は農村の中間層の構成員である。その上の層には牧師や地主がいる。しかし、努力して、大荘園の猟番頭兼管理人にまで出世した Geoffrey は才覚と運とによって富を手に入れ、属する階層も同じ中間層ながら運送屋や職人より上位と

なった。当然、更なる上昇を望んでいる。そのために娘 Fancy に都会で高等教育を受けさせ、教養の高い洗練された女性にし、有利な結婚をさせようとして、密かに娘が上層階級の仲間入りをすることを狙っている農村の新しい階層である。

そこへ Geoffrey より下の層にいる Dick Dewy が Fancy と結婚させて欲しいと、求婚にやって来ても、そう簡単には許される筈がない。当然言下に断られる。「きみはファンシーが、こんな質素な、穴蔵みたいな粗末な家にて、行儀作法や、上品な言葉遣いや、音楽の腕前や、学問の知識を身に付けたとでも思うのかね」と言い、冷然と娘を師範学校へ入れた理由を説く。彼が物を持っているのに、わざわざこんなひどい暮らしをしているのは、「もしだな、どこかの紳士が娘を見て、自分の相手に相応しい程上品だと認め、結婚したいと思う。娘の方でもそう思う。その時に、彼に負けない位の財産を持たせたいからだ。さあ、これでも君は資格があると思うかい」と畳み掛ける。これを聞いて Dick には返す言葉はなかった。自分より遙かに身分が上の女に求婚するなどという我が身の思い上がりに肩を落とし、自分の厚かましさに驚きながら、悄然と踵を返したのである。狛番頭は娘が紳士階級の男性にめあわせるように、意識的に教育して来たので、Dick より Shiner の方に好意を抱くのは当然である。

一方、Fancy は「垣根の外」の教育を受けて来たので、父親さえ「自分の言葉が娘の教養ある言葉遣いにそぐわなかったのではないかと話題を変える」ような気を遣わなくてはならない人物に成長している。Fancy は父が属しているより上の階層、即ち紳士階級の仲間入りが可能としたらできるかもしれない圏内に既に上昇している。だが、恋人の Dick は決して紳士階級に入れない。しかも、Fancy は Dick の粗野で洗練されていない礼儀作法に終始失望を味わわれている。2 人の間には教育においても、礼儀作法においても越え難い溝が既に存在している。新旧の価値観や都市と田園の文化など、それぞれの相違や対立で揺れ動く 19 世紀イギリス社会の姿が Fancy と Dick の関係に投影されているし、更には次に見るように Fancy 一個人の中に相対する 2 つの価値観が存在しているのである。

Fancy は「気まぐれ」という名が示すように、Dick, Shiner, Maybold という 3 人の男性の心を惑わす移り気な女性と解釈されがちである。確かに、彼女の態度はくるくる変わりどっちつかずなことが多い。今後ハーディが繰り返し描き続ける女性特有の媚態を示したり、お世辞に敏感であったりする特徴が見られる。しかし、Fancy の持つ曖昧さは、単なる浮気心の現れなどではなく、Dick の持つ田園的心性と Maybold の持つ都会的心性のどちらに帰属すべきか決めあぐねて迷っているため生じる葛藤の現れと解釈した方が適当である。後の小説 *Jude the Obscure* の Sue のように、男性を破滅に導く女性の気まぐれをのみ、Fancy の中に描いているだけとしたら、メルストックの聖歌隊について、小説の前半を割き詳しく述べる必要はなかったであろう。ハーディの興味は、都会からかつてないほどの速さと規模を以て押し寄せて来た階層間の可動性に影響され、分裂が進行しつつある田園世界の状況を、一身の中に

抱え込む人物としての Fancy にあった。

Fancy はメルストックの田舎で生まれ、その自然の中で育った。幼い時に育った世界は Dick 一家のものとそれほど隔たっていない。一方、母の死後都会に住む寄宿学校経営の叔母のもとで教育を受け、教員養成の学校では主席で免許状取得という優秀な成績を残し、文明社会を垣間見ている。そしてオルガン演奏に優れた才能を示す学校の教師という、出自と経歴が既に「都会的心性」の持ち主であることを語っている。彼女自身の中に、既にアンバランスな二面性を内在させているのである。生まれ育った環境の基盤である田園的心性を教育によっても覆い隠されることのなかった Fancy は Dick の素朴さや誠実さに共感を抱く。他方では、受けた教育の影響により彼を愛しながらも、Maybold の知性、教養、洗練された上品さなどに魅了されてしまうことにもなる。

Fancy の Dick に対する愛情は父の反対のためにかえって燃え上がる。悲嘆に暮れる彼女は、Dick の求婚約 1 ヶ月後、外出途中に大嵐に遭う。

The trees of the fields and plantations writhed like miserable men as the air wound its way swiftly among them: the lowest portions of their trunks, that had hardly ever been known to move, were visibly rocked by the fiercer gusts, distressing the mind by its painful unwontedness, as when a strong man is seen to shed tears. Low-hanging boughs went up and down; high and erect boughs went to and fro; the blasts being so irregular, and divided into so many cross-currents, that neighbouring branches of the same tree swept the skies in independent motions, crossed each other, or became entangled. (IV-iii)

天候の描写で人物の心情の微妙な変化を間接的に表現するのが巧みなハーディは、Dick を想って千々に乱れる Fancy の心をこのように描写している。この時、偶々雨宿りさせてもらった魔女と噂される Elizabeth Endorfield に、Dick との結婚について、父の許しを得る助言をしてもらう。魔女と言われてきた Elizabeth だが、この革新的な若い牧師のもとでは、徐々にその神秘力を失い始めている。しかし全くその力を喪失した訳ではない。Fancy は彼女の筋書きに従って、食物を僅かしかとらない。父 Geoffrey は遂に根負けして 2 人の結婚を許すのである。ハーディはここで、未だ過去の迷信的尻尾を引きずる魔女に deus ex machina の役目を負わせている。袋小路に陥って、他に問題打開の名案がないところへ Elizabeth の出現で一転解決に向かったのである。高度の教育を受けた者なら、より理論的に解決の糸口を見つけようとするだろうが、Elizabeth の方法は教育はなくとも長い経験に基づく生活の知恵といった解決方法である。彼女を魔女と言いながら、彼女にこのような庶民の智恵を受けるところにも、ハーディの田園的心性に与す姿勢が窺えよう。結婚式は翌年のヨハネの祭日に決められ

た。

やがてミカエル祭も過ぎ聖歌隊は解散し、収穫感謝祭に近い日曜日となった。Fancy がメルストック教会で初めてオルガンを弾くことになっている日である。この日は生憎、Dick は近くの村へ葬式に出掛け、彼女の晴れ姿が見られない筈であった。彼が不在であっても、人から立派に見られたい Fancy は、「羽根飾りの帽子をかぶり、これまで質素にまとめていた髪を下ろし、肩のあたりまで豊かな巻き毛にして垂らしていた」(IV-v)。そこへ何とか彼女の晴れ姿を一目でも見ようと、無理をして時間を割いてやって来た Dick はこれを見て戸惑う。婚約者がいないと分かっている場所にこんなに着飾って来るとは、Fancy は Dick のそんな心情はとうの昔に見すかしていた。仕方がなしに誉める Dick に向かって、「私、そんなふうにあなたが誉めて下さるのを聞くの好きよ」、「女にはそれが肉であり、飲み物にあたるんだわ」と言ってはばからない。晴れ姿を婚約者に見せられない残念な気持ちと、美しさを他の人々に誇示し立派に見られたいという見栄の気持ちが同居する Fancy の性格や行動の曖昧さや相反する価値観は、先にも述べたように、ハーディの皮肉な設定として彼女に付与されたものである。

都会でどんなに高い教育を受けた Fancy であっても、Dick や村の子供たちと過ごした幼い日の思い出は心の中に存在の核のようにある。彼女がオルガンの奏者になるという話が出たとき、「僕はあのひとが特に弾きたい訳ではないと言ったことを知っています。だってあのひとは僕らの友人なんですから」(II-iii) と弁護している。その「僕らの友人」たる Fancy が聖歌隊の人々に、身の置き場のないような惨めさを経験させる当人となるのは、矢張り皮肉な役回りを背負っていると言えよう。Fancy はオルガンを弾く役目を自分から買って出た訳ではない。だが受けた教育によりオルガンを弾く能力を身に付けたため、オルガン導入の推進役である Maybold 牧師と、それに反対する聖歌隊の間で、両者を引き裂く立場に置かれることによって、自らも分裂した内部を抱えて存在することになる。

Fancy の派手な衣装を村の女性たちは、伝統に基づく慎み深さの欠けたものと罵り非難するが、牧師 Maybold は説教の間彼女が身近にいることに大いなる喜びを感じる。「その朝の彼女の音楽の成功を喜んだ感情は、単に新しい秩序の始まりに感じる聖職者の喜び以上のものであった」(IV-v) のである。

The old choir, with humbled hearts, no longer took their seats in the gallery as heretofore (which was now given up to the school-children who were not singers, and a pupil-teacher), but were scattered about with their wives in different parts of the church. Having nothing to do with conducting the service for almost the first time in their lives they all felt awkward, out of place, abashed, and inconvenienced by their hands. The tranter had proposed that they should stay away to-day and go nutting, but grandfather

William would not hear of such a thing for a moment. 'No,' he replied reproachfully, and quoted a verse: "Though this has come upon us let not our hearts be turned back, or our steps go out of the way."'

So they stood and watched the curls of hair trailing down the back of the successful rival, and the waving of her feather as she swayed her head. After a few timid notes and uncertain touches her playing became markedly correct, and towards the end full and free. But, whether from prejudice or unbiassed judgment, the venerable body of musicians could not help thinking that the simpler notes they had been wont to bring forth were more in keeping with the simplicity of their old church than the crowded chords and interludes it was her pleasure to produce. (IV-v)

会堂のあちこちに散らばり、「場違いできまりが悪く、手のやり場に困っている聖歌隊の人々」は、こうして共同体の結び付きを失い、やがて宗教ばかりか、自然との調和をも失って行く。そして、伝統的な社会的自衛手段を奪われてしまった人々は、個々の繋がりやの切れてしまった孤立した個人となり、漂流して行くことになる。隣人関係も破綻を迎え、家族さえも解体してしまうのも間近に迫っている。富は提供してくれるが、社会参加も人間的な結び付きも何もないという社会体制の戸口に、彼らは今立たされているのである。Maybold 牧師は、こうした彼らの生活の重要な基盤のひとつ、言い換えれば彼らの血肉の一部でもあった聖歌隊の役目を失ってしまった人々の心の痛みに向かい気附こうとはしない。牧師の直ぐ側でオルガンを弾く Fancy, Fancy が直ぐ側にいることで恍惚となっている Maybold, 遠くから「自分たちを打ち負かしたライバル」の背に流れる巻き毛を眺める村人たち。Fancy が中心に置かれているというこうした構図はまさしく分裂する彼女の立場を象徴的に表している。

分裂する Fancy の立場は実に不安定な矛盾に満ちた両面価値的なものである。Dick や Maybold や Shiner に対して Fancy の取る態度は、彼女の曖昧さ、不安定さを如実に示している。彼らはそれぞれ不透明な、捉えどころのない Fancy の態度に翻弄される。結婚することになる Dick にしても、彼女は主体的な意志を以て夫として選んだのかもはっきりしない。Dick を受け入れながらも、Shiner や Maybold への関心も捨て切れないでいるからである。

Dick が Fancy を馬車で荷物と一緒にヨールベリーの森の家から教員宿舎まで送り届けた後、2 人はお茶を入れたとき汚れてしまった手を 1 つの洗面器の中で洗う。「どちらが私の手で、どちらがあなたの手か分からないようにごちゃごちゃになっているわ」(II-vii) と水の中で触れ合う手の感触を楽しんでいた Fancy の打ち解けた態度に、Dick はただ感動に胸を一杯にするだけである。Dick のこんな気持ちをよそに、Fancy は暫くすると、何か気もそぞろといった様子で窓の外に目をやり、「誰も私のことを気に掛けてくれないみたいね」と呟く。「私

が戻ったかどうか確かめに、誰も来てくれないわ、牧師さんさえもね」と言った次の瞬間、当の牧師が近付いて来るのを見付ける。「あらあの方が来るわ。あなたがここにいない方がいいんだわ。つまりとってもきまりが悪くないこと」と叫び、顔にさっと血が上り、牧師に対してというより Dick に対して腹を立てている表情をした。素朴で純真な Dick にはこうした Fancy の態度が全く理解できない。また、Fancy が Shiner に示す態度も Dick を不安な気持ちにする。「あのひとが少しばかり気の優しい様子を見せさえしなければ、シャイナーだってあんな思い切った態度は取らない筈なのに」と考え込むのである。

このような状況で Dick はバドマスから Fancy を馬車に乗せて帰る途中に、全くものの拍子という感じで、Fancy から結婚の承諾を得る。その直前、「真新しい二輪馬車」がしゅうという音を立てて追い越して行った。馬車を御しているその持ち主と同乗者の Shiner は Fancy を振り向いて尊敬の眼差しで見つめた。Dick はその時 Fancy が示す微妙な変化を鋭く看取った。この時の Dick の言葉は彼女の本質を表している。

‘I was thinking how different you in love are from me in love. Whilst those men were staring you dismissed me from your thoughts altogether and—’

‘You can’t offend me further now; tell all!’

‘And showed upon your face a pleased sense of being attractive to ’em.’

‘Don’t be silly, Dick! You know very well I didn’t.’

Dick shook his head sceptically and smiled.

‘Dick, I always believe flattery *if possible*—and it was possible then. Now there’s an open confession of weakness. But I showed no consciousness of it.’(III-ii)

他の魅力的な男性を見れば、例え自分が側にいようと、自分のことなど念頭から消し去ってしまうような女性であることが分かっていても、Dick は Fancy に結婚の申し込みをし、Fancy もそれを受け入れる。

Fancy の気持ちは Dick と結婚すると決まって表面上安定したように見えても、未だ揺れ動く。第 4 部第 6 章で彼女に大きな試練の時が来る。教会でのオルガン初演奏が終わった後、彼女は校舎に戻って来た。教室の窓を開き、外に降りしきる雨を眺めながら物思いに耽っていた。大きな仕事を成し遂げた後、緊張が解けてぽっかりと穴の開いたような虚ろな気持ちになっているとき、1 人の男の黒い影が小森の向こうから現れた。オーバーも着ておらず、傘もさしていない。それは彼女に会いたくて雨の中をやって来たびしょ濡れの Dick であった。「雨の中に傘もなしにびしょびしょ濡れの男なんて、何てみっともなく、惨めに見えるのだろう」(IV-vi)と感じて、つれない態度をし追い返してしまう。その後、同じように黒づくめの男が

やって来るのが見えた。今度は Maybold 牧師であった。彼はちゃんと傘をさしている。しかも「上等の絹張りで造りも優美なもの」であることを、Fancy は本能的に見て取る。Maybold の顔は血が熱く燃え、目はきらりと輝いて美しく見える。惨めな Dick の姿が未だ Fancy の網膜に焼き付いている時に、この美しい Maybold が突如彼女に求婚する。「仔馬に曳かせる馬車、花、仔馬、楽しい社交界」という優雅な生活を彼女の前で描いてみせてくれる。そして、ピアノでも「何だってあげますよ、ファンシー、あなたの喜ぶものなら、何だって」と彼女の夢を叶えてくれる眩いばかりの未来の可能性が、熱い求婚の言葉に添えられたとき、Fancy は呆然とし、誘惑には抵抗できず遂に承諾の言葉を漏らす。Dick の素朴さを愛しながらも、その外見のみすぼらしさ、言い換えれば田舎に住む者の無骨さに幻滅した後、愛していないにしても、好意は持っている Maybold の美しさに心を奪われ、彼との夢のようなバラ色の未来に忘我の境地へ誘われ、都会の華やかさへの憧れを強くし、陶然となる。婚約者のある身でありながら、彼の求婚を受け入れてしまう。外では雨が窓に当たってしぶきを上げ、その音は、喘ぎながら、密やかに、途切れ勝ちに承諾する彼女の答えを消してしまった。ハーディは雨に託して彼女の心の懊悩を描いている。オルガン演奏後の虚脱状態にあり、心が虚ろな瞬間に、言い換えれば精神が無意識の状態にあったとき、不意打ちを喰らったような Maybold の求婚。Fancy の心の奥底に潜む感情が何の障害も無く露呈されてしまった。Fancy の内部の分裂状態は、このようにその時の状況でどちらにも傾いてしまう不安定で危険な状態にある。この時こそ Fancy にとって最大の精神的危機であり、試練であった。田園的な伝統の世界と都会の革新的文明の間を揺れ動く人物、即ち田園的心性と都会的心性の相剋に苦しむ女性の姿が如実に描写されている。Fancy の肖像は今後 *Far from the Madding Crowd* の Bathsheba を経て、*The Return of the Native* の Eustacia に受け継がれ、悲劇的要素が加えられて発展して行く。また *The Woodlanders* の Grace や *Jude the Obscure* の Sue もその原型を辿れば Fancy にまで遡ることができよう。Grace も Sue も Fancy のように田舎で生まれ都会で教育され、両義性を内在させ、どちらに帰属意識を持つべきかで揺れ動くことになるからである。

「選択」というより、場当たりの過去の行動に絡め取られて身動きできずに、都会への憧れを捨て切れないまま、Fancy は Dick のもとへと戻って行く。Maybold への断りの手紙の中に端的に彼女の「都会的心性」が語られている。

'DEAR MR MAYBOLD, —I have been thinking seriously and sadly through the whole of the night of the question you put to me last evening ; and of my answer. That answer, as an honest woman, I had no right to give.

'It is my nature—perhaps all women's—to love refinement of mind and manners ; but even more than this, to be ever fascinated with the idea of surroundings more elegant and

pleasing than those which have been customary. And you praised me, and praise is life to me. It was alone my sensations at these things which prompted my reply. Ambition and vanity they would be called ; perhaps they are so. (IV-vii)

Fancy が心を引かれるものは「洗練」,「贅沢」,「誉められること」であるという。これは冷静で正確な自己認識であろうが、果たして2人を生涯結び付ける愛の保証となるのであろうか。牧師からは全てを打ち明けるようにと短信が来ただけであった。

様々な紆余曲折の末、Dick と Fancy の結婚は成就する。娘を何とかして自分より上の階層の男性と結婚させようとしていた父を納得させ、教区委員で地主の Shiner の求婚を蹴り、華やかな結婚生活をちらつかせて誘惑する牧師 Maybold の求婚をやっとの思いで断って、Fancy が最終的に落ち着いた先が Dick との結婚であった。物語の最後で都会志向の Fancy が田舎者の Dick と結婚したところに意義がある。そこにはメルストック聖歌隊の退陣という一方的な敗北とは違って、田園と都会、旧勢力と新勢力、伝統と革新、の融合と和解が暗示されていよう。即ち、この結婚は単なる個人のレベルのみで見られるべきでなく、古い世界が如何にして新しい価値観を受け入れたか、新しい価値観が如何にして古い世界に溶け込んで行ったかという問題の解答と考えるべきであろう。Dick が Fancy への愛を貫き通す過程は、都会的価値観への執着が心の中で引き起こす葛藤に苦悩する彼女を妥協しながら受け入れる過程でもあった。Dick は彼女を勝手に理想化せずに、都会文明も含め彼女をあるがままの姿で受け入れ愛しているのである。一方、Fancy は自分の都会的価値観を失わずに、田園社会に帰って行くことができないものかと努力している。結婚式後、Dick に「僕たちはお互いに秘密を持たないようにしようね。いつまでも何の秘密もなしにね」と言われたとき、すかさず「今日からはね」(V-ii)と答えている。Maybold との一件を生涯秘密にして隠し通そうと決心する Fancy は、ここで例えば田園に戻ろうとも、自分の都会的心性は保持していこうと誓っているのであろう。ハーディはこういった Fancy を「運送屋の妻にしては余りに洗練された美しい目をしているが、余り善良とは言えまい」(V-i)と評している。Fancy にしても、都会的心性を執拗に主張することの不適当さは充分心得ている。それ故に、結婚式では不承不承ではあっても、田舎の風習を重んじた婚礼形式と踊りを取り入れることを受け入れているのである。

メルストック聖歌隊の運命と Dick と Fancy の結婚とを通して描いたのは、ハーディが理想とする田園と都市の共存の在り方、田園対都会という新旧両価値観の対立に対する彼なりの妥協的解決策であった。だが、何時までも田園が新しい価値観を受け入れる寛容さも続かず、やがて圧倒的な新しい世界の力の前に屈服する時が来るという予兆を Fancy の胸に秘めた秘密が暗示していよう。本作品は都会文明に破壊される前の、ハーディが哀惜の念を以て描いた、田園世界の束の間の夢の世界である。

注

- 1) Purdy, *A Biographical Study*, p.7
- 2) Hardy, *The Early Life of Thomas Hardy*, p.113
- 3) *Under the Greenwood Tree*, p.20
- 4) *ibid.*, pp.28-29
- 5) Millgate, *Thomas Hardy, His Career as a Novelist*, p.43
- 6) *Under the Greenwood Tree*, p.27

参考書誌

1. *Under the Greenwood Tree*, The New Wessex Editions ; The Novels of Thomas Hardy, ed. by P. N. Furbank, Macmillan, 1975
2. Hardy, Florence Emily, *The Early Life of Thomas Hardy 1840-1891*, Macmillan, 1928
3. Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969
4. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy*, New Direction, 1964
5. Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975
6. Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet*, David and Charles, 1976
7. Hurst, Alan, *Hardy : An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980
8. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography*, Oxford University Press, 1979
9. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, His Career as a Novelist*, The Bodley Head, 1971
10. Purdy, Richard Little, *Thomas Hardy, A Bibliographical Study*, Oxford University Press, 1979
11. Saxelby, F. Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary*, Greenwood Press, 1980
12. Thurley, Geoffrey, *The Psychology of Hardy's Novels*, University of Queensland Press, 1975
13. Williams, Merryn, *Thomas Hardy and Rural England*, Macmillan, 1978
14. 大沢 衛 (編) 「ハーディ研究」 (現代英米作家研究叢書) 英宝社, 1976
15. 大沢 衛・吉川道夫・藤田繁 (編) 「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」 篠崎書林, 1978
16. 小田 稔 「トマス・ハーディ」 篠崎書林, 1990
17. 佐野 晃 「ハーディ」 冬樹社, 1981
18. 深沢 俊 「T. ハーディ」 英潮社, 1978
19. 藤井 繁 「黄昏」 千城, 1988
20. 本田顕彰 「ハーディ」 (20世紀英米文学案内4) 研究社, 1969